

2018 年度博士論文（要旨）

高齢者の意識的及び無意識的自己像と
成育歴との関連
—交流分析理論の脚本分析を中心に—

桜美林大学大学院

中村 延江

目次

第1章 序論	・・・1
はじめに	
メンタルヘルスと自己像	
意識された自己像と無意識の自己像	
質的分析の方法と脚本分析	
第2章 研究の目的と意義	・・・2
研究の目的と意義	
研究デザイン	
第3章 研究	・・・2
研究Ⅰ 主観的幸福感とバウムテストの指標との関連	
目的	
対象と方法	
結果	
考察	・・・3
研究Ⅱ 高齢者の無意識の自己像及び主観的幸福感と成育歴との関連	
～交流分析理論による脚本分析を用いた質的研究～	・・・3
目的	
対象と方法	
インタビューガイド	
結果と考察	
第4章 総合考察	・・・4
文献	・・・4

第1章 序論

高齢社会における高齢者の現状

現代は高齢社会であるが、わが国では2007年に高齢者率が21%を超え超高齢社会を迎えた。その後高齢者率は増加し、2016年9月の総務省の報告では、27.3%となり、過去最高を更新している。男性は人口の24.3%であるが、女性は30.1%となり、高齢者の女性は人口の3割を超えたことになる。

そうした状況の中、元気な高齢者も多く、高齢者を65歳からとするのは実情に合わないとの意見もある。わが国の高齢者の就業率は2016年時点で世界主要7か国と比較しても高く21.7%と報告されている(平成28年版 高齢社会白書 内閣府)。65歳以上の高齢者で、まだ仕事を持って働いている人や就業はしていないが何らかの形で社会活動をしている人、地域活動をしている人、ボランティアをしている人、あるいは趣味、習い事をしているなど、社会活動に参加し生き生きとした生活を送っている適応的な自立高齢者も多い。

一方、うつ状態や不安感を呈して精神的に安定した老年期を送ることができない高齢者も少なくないと思われる。平成23年の政府の患者調査による統計で、うつと判断された患者は60代で男性52千人、女性99千人、70代では男性45千人、女性93千人、80代で男性13千人、女性56千人となっている。

生物学的視点からみればやはり老年期は老いるという事実直面せざるを得ず自分の人生を振り返りどのように統合するかが課題となると考えられ、それを乗り越えることが困難な高齢者も少なくないと考えられる。

第2章 研究の意義と目的

本研究では、生活機能を保ち適応的に社会参加している高齢者いわゆるshurokの提唱するprivileged aged(優秀老人:柴田)を対象に元気な要因を調査し、適応困難な高齢者の心理的サポートや介入の方法に役立てること目的にしている。

これまでの研究で、心身の健康には生活満足感や幸福感を含めて自覚的なものが大きく影響すると言われている。つまり自分をどう捉えているかという自己の在り方が大きく影響すると考えられる。

そこで今回は自己像について調査を行うが、自己像には意識的なものと前意識あるいは無意識の自己像がある。これらの自己像はどのような成育歴から形成されるのであろうか。また、この三者はどのように関連しているのかを検討し、元気に社会参加している高齢者の心理的要因を調査する。

研究は、はじめに研究1として意識的自己像の指標と考えた主観的幸福感尺

度と無意識の自己像が示されると考えられている投影法心理照テストであるバウムテスト、感情状態を把握するためのうつ尺度（SDS）と不安尺度（STAI）を実施してその関連を調べた。その上で特徴的な事例について成育歴を詳細に分析するために交流分析理論の脚本分析を半構造化面接で行った。

第3章 研究

研究1

対象は、65歳以上で、認知症を発症していず、生活機能が保たれており、何らかの形で社会活動を行っている高齢者157名。

方法は、意識的自己評価を示すものとして主観的幸福感尺度、SDS、STAI、無意識的自己像を把握するものとしてバウムテストの4種類を実施し、それらの関連を調査した。

結果、主観的幸福感とSDS、STAIには負の相関があったが、バウムテストとは相関はみられず、いくつかのパターンがみられた。

考察として、これは、各テストが把握しようとするものの心理レベルの違いによるものであると考えられた。

研究2

研究1で得られた、意識的自己像と無意識の自己像のいくつかの特徴的なパターンから事例を選定して、それらがどのように形成されたのかを見るため、成育歴との関連を調べることにした。

対象は研究1と同様の高齢者の中、了解の得られた9名である。方法は、質的研究としていくつかの事例に半構造化面接によるインタビューを行った。

この研究では、高齢者がどのような人生を歩んできたのか、どのような自己像を持っていて、自分の生き方をどう捉えていて、現在の適応状態はどのような要因によるのか、思考・感情の処理、行動（反応）が形成されたプロセスはどのようなものか等を交流分析の理論を踏まえて把握しようとする。

具体的な方法は、交流分析理論の脚本分析を用いた。脚本分析はライフストーリー研究と同様、ナラティブなものだが、いくつかのキーワード（禁止令、幼児決断、基本的構え、脚本のパターン等）で焦点を絞って分析していく方法である。

インタビューガイド

対象者へのインタビューは、以下のインタビューガイドに沿って行った。

内容

幼児期の禁止令・拮抗禁止令・人生のモットー・座右の銘

幼児期の欲求阻害場面での対応の仕方、対応の仕方が変化したか否か、
変化した場合の時期、きっかけ、現在の対応の仕方

老年期の発達課題についての在り方（老いの受容、新しい役割の獲得、
これまでの人生の受容、死の受容など）

結果

9 事例について概観すると、

事例 1 は、意識的自己像も無意識的自己像も共にかなり得点が高く、実生活でも元気で社会活動を行っている。脚本分析によって成育歴を検討したところ、マイナスの脚本（敗者の脚本）を形成させるような問題はみられなかった。

元気な要因としては、物事に対するポジティブな認知スタイルにあると考えられることと、意識して「上手くやれる」という自信を確認することと思われた。

事例 2 は、意識的には頑張っている自己像を持っているが、バウムテストに示された無意識の自己像はかなり未成熟で緊張感があり、ゆったりした安定感のあるものではなかった。しかし、現在元気に社会参加していて自分でも満足している要因は何であろうか。無意識として感じ取っている自己像は恐らく虚勢をはっている緊張感の高い、伸び伸びしたものではないと推察されるが、それを認めず、状況をはねのけようとする頑張りであろうと考えられる。

事例 3 は、意識的には問題なく自己実現していて社会的に勝者の脚本を形成しているようだが、バウムテストに示された無意識の自己像は自信を持って自己実現したものではなく、常に何かから抑圧され、遠慮して、自分を抑えていることが推察された。そのため感情の鬱積が考えられるものであり、高齢期になっても自分らしくは過ごせていないことが考えられた。積極的に社会活動に従事している要因を考えると、現状の受容であろうか。高齢者の自分の人生をこれで良かったと思う合理化もあり、思い込みもあるかのかも知れないが、「結構良かった、大変なことも恵まれていたことの中のことで、仕方のないこと」と自分で思っているようだ。インタビューの中でもしばしば語られたが、幼児期に裏切られた思いが尾を引いているようであったが「一人で乗り切る」という幼児決断が、頑張っている今を保っていると思われた。

事例4は、バウムテストに示された無意識の自己像にかなり問題があるようであった。自覚的には、問題なく日常生活を元気に過ごしていると思っ
ているようだが、実際はいろいろな問題を抱え、我慢している様子がインタ
ビューからも伺えた。友人との付き合いなどは相手に合わせていることもあ
って表面は問題なく過ごしていると思われる。

事例5は、禁止令が与えられてはいたようだが、それを受け取っていない。
多少、自信のなさや不安感の中に持っていて、意識的自己像や日常の行動か
ら（インタビューの中での生活の仕方についての語りからは積極的でどちら
かというガンガン行動する）は少し隔たりがあるが、内心は傷つき易くナ
イーブさを持った自己像であることがバウムテストや成育歴から想像され
る。しかし、生来がのん気で雑とのことで余り真剣に深く考え込まないこと
と自分の状態を受容していることが元気でいる要因と考えられる。

事例6は、特に成育上の刺激は良くも悪くもなかったと考えられる。しか
し、愛情欲求が満たされなかったことが推察され確固とした自信のある自己
像が描けていない。大きな困難に出会うこともなかったので、深くものごと
にかかわることもなく平凡にそこそこに過ごしてきている。何とか元気でい
ることの要因は「こんなもんだ」という自己受容、状況の受容あるいは諦観で
あろうか。また、深くものごとに関わらない態度、また、これで良いとい
う捉え方にあるように思われる。

事例7は、禁止令らしきものは認められず、厳しい両親であったようだが、
心の底で愛されているという自信があり、問題にはなっていない。やはり余
り深く考え込まないとのこと。しかし、自己拡大欲求や自己顕示欲がややあ
り自分でもっとこうすればよかったとか、状況が許せばもっと～とかの思い
強く、少し前までは置かれた環境に不満足感も持っていた。高齢になってそ
れを受け入れるようになってきている。全体としては問題の無い脚本であるが
「平凡な脚本（勝てない脚本）」の持ち主と言えよう。元気な要因は「こん
なものだろう」という自己受容、状況の受容、諦観であると考えられる。

事例8は、特に目立った禁止令のようなものはなく、拮抗禁止令に従って
真面目に着実に成育してきた事が話された。自覚としては自信を持っていた
面と周囲に依存する面をもっていた。周囲に頼りながらうまくやってこられ
たとのことだが、しっかり向き合わなかったためか表面に出ていない自己
像を感じているようでもあり、少し自己確実感に欠けるのかもしれない。し
かし、自分で満足して元気に過ごしていられるのは、物事に直面しないで、困
ったら避けるという生き方のスタイルによるものではないかと思われる。

事例9は、禁止令はごく弱いものだが、「近づくな」が考えられる。しか

しそれをはねのけるエネルギーと力があつたようで、拮抗禁止令も幼児期は受け入れながら、そこから脱出して活動している。かなり人生の生き方としては成功しているが、深く考えない、「脳を働かせる前に行動している」との事が自分でも元気な要因と述べているように物事をじっくり考えて行動はしていなかったようであり、むしろそれが サバイバルの要因であつたようである。現在も元気な要因は深く考えない事のようなのである。

まとめ

主観的幸福感尺度に見られた意識的自己像及びバウムテストに示された無意識の自己像と脚本分析による成育歴の三者の関連、および高齢期の現在、元気で活躍しているあるいは元気にふるまっている要因として考えられることについてまとめると以下の表のようになる。

事例	意識的自己像	無意識の自己像	成育歴との関連	要因
1	高い	良好	◎	認知スタイル
2	高い	やや不良	◎	思い込み
3	普通	やや不良	◎	諦観・受容
4	普通	不良	◎	忍耐
5	普通	普通	○	自己受容
6	普通	不良	○	状況受容
7	普通	普通	△	考えない・受容
8	高い	やや不良	○	困難回避
9	高い	不良	○	考えない

結果を、バウムテストの解釈と成育歴との関連を詳細に検討した。

インタビューの結果、成育歴上のエピソードと無意識の自己像との関連が明確に示された。すなわち、成育歴上のエピソードが無意識の自己像の成立に大きくかかわっていることが示唆された。例えば、脚本分析で明らかになった成育歴上のポジティブな体験は問題の無い無意識の自己像を示し、高齢者になった現在もより安定した適応的な社会活動につながっているようだが、成育歴上のネガティブな親子関係が語られた事例では、バウムテストに示された無意識の自己像は良くないか不良と評価されるものであった。例えば、子供の時に両親が離婚し、実母において行かれ、継母には全くかまってもらえなかった事例では、バウムテストでも脚本分析でも愛情飢餓のサインが明確に示されていて、人を信頼することができず、高齢になっても人と親密に関わることができない人生脚本を持っている事が示されていた。この事例では、人生や自分あるいは

他人に対する基本的な考えである「基本的構え」が「自己肯定、他者否定」であった。これは自分を守るために「自分は正しい、相手は悪い」という考え方をみにつけたものと思われた。

全体としてそれほど悪い描画ではなくともいくつかの問題点が示されるものであった。9例の中、脚本分析で明確な禁止令が把握された4例では無意識の自己像を示すといわれるバウムテストで問題点が見いだされた。無意識の自己像に何らかの問題がある事例では、インタビューの結果を検討すると自己確実感が無かったり、自信が無かったりする点が見いだされた。

しかし、今回は何らかの形で社会参加している自立高齢者が対象であり、当初の予想と異なり、脚本分析による問題点と無意識の自己像に問題が見いだされても、自覚している意識的自己像は悪いものではなかった。

これについては、高齢者が自分の人生を振り返って「そう悪いものではなかった」と思いたい、合理化や思い込みによるものあるいは、状況受容や諦観によるものではないかと考えられた。

したがって、当初予想したよりは、一見元気に社会参加している高齢者でも無意識の自己像に問題があるケースが少なくないということが推察されたが、無意識の自己像に大きな問題が示されていない場合は、実際には無意識の自己像が現在の日常にそれほど大きく影響しないのかもしれない。日常生活で元気に活動するにはむしろ、意識的に思い込むことやポジティブな認知が重要であることが示唆された。

無意識の自己像に大きな問題があった事例においては、元気にふるまっているようだが、実際は日常生活でかなり問題があるようであった。このような事例については対象者が希望すれば脚本の書き換え等が必要であろうと考えられた。今回の対象者では、無意識の自己像を表すバウムテストやインタビューによる脚本分析で大きな問題を示したのは1事例のみであった。この事例でも自覚的には問題はないとしていた。

考察

今回、対象とした元気に社会活動を行っている事例では、そうした無意識の自己像が悪い・良くない場合でも自覚的には元気で自己実現している、生き方に満足しているという主観的幸福感が高得点を示していた。

その要因は何であるのかを詳細にインタビュー結果を他の情報も加えて検討してみると、無意識の自己像が悪い場合は実際はかなり無理をしていたり、抑圧感を感じていたりするということがみられたが、概ね、「仕方がないこと」「こんなもの」といった諦めか状況受容、自己受容、あるいは年齢による「自分の

人生をだめだったと思いたくない」合理化の規制が働いていたことが推察された。

すなわち、無意識の自己像は本質的には、心の本当の安定感や自尊感情、自信等に影響を与えていると思われるが、実際の日常生活では、自分が「どう思っているか」という意識的自己像と関連しているようであった。

今回は社会参加している自立高齢者が対象であったが、今後の課題として何らかの不適応感を持っていたり不適応症状を呈している高齢者を対象にバウムテストを実施し、無意識の自己像に大きな問題がない場合には物事のとらえ方を変容させるような支援を行い、大きな問題が示された場合には脚本分析を行い脚本の書き換えを考慮する支援も必要ではないかと考えられた。

文献

- 青井利雄 2003 高齢者バウムテストの定量的評価についての基礎研究
仁愛大学紀要 第2巻 97-106
- 青木邦男他 2012 在宅高齢者の心理・精神的特性、その相互関連およびkobayashi 社会的行動特性との関連性 保健の化学 第54巻 第4号 279-285
- Bolander, K. (高橋頼子訳) 1999 樹木画によるパーソナリティ理解 ナカニシヤ出版
- 朴秋夢・浅川潔司他 2011 大学生の主観的幸福感と学校適応感の関係に関する中比較研究 学校教育学研究 第23巻 35-42
- Diener, E. 2000 Subjective well-being. The science of happiness and a proposal for a national index, American Psychologist
- 江花昭一 1999 ある女性の脚本と再決断 交流分析研究 24(1) 59-64
- 深澤道子 1999 再決断療法 交流分析研究 24(1) 18-25
- 深瀬裕子他 2010 老年期における心理社会的課題の特質：Eriksonによる精神分析的個体発達文化の図式第Ⅷだ段階の再検討 発達心理学研究 第21巻 第3号 266-277
- ドゥニーズ・ドゥ・カステイーラ 阿部恵一郎訳 2002 バウムテスト活用マニュアルー精神症状と問題行動の評価 混合出版 東京
- 橋本京子・子安増生 2011 楽観性とポジティブ志向及び主観的句副官の関連について パーソナリティ研究 19巻 3号 233-244
- 石井留美 1977 主観的幸福感研究の動向 コミュニティ心理学研究 1, 94-107
- イアンスチュアート, ヴァン・ジョインズ (深沢道子監訳) 1991 TA TODAY
最新・交流分析入門 実務教育出版 東京
- 伊藤裕子・相良順子他 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究 第74巻 第3号 276-281
- 木下康仁 2009 質的研究と記述の厚みーM-GTA・事例・エスノグラフィー 弘文堂 東京
- 小林由美子他 2018 地域在宅高齢者における健康関連の逆境に対するレジリエンスの構成概念 老年社会科学 40巻 第1号 32-41
- Koch, C (林勝造・国吉政一・一谷彊訳) 1970 バウム・テストー樹木画による人格診断法ー 日本文化科学社
- Koch, C (中島ナオミ・宮崎忠男訳) 2010 バウムテスト第3版 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究 誠信書房
- 金子学・原田邦彦 2011 健康心理学に基づく主観的幸福感指標と測定法開発の試み 心健康生活・都市づくりに関する研究 41-55
- Larson, R. 1978 Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans Journal of Gerontology 33 105-129

- Maserati, M. S. 2015 The Tree-Drawing Test (Koch's Baum Test): A Useful Aid to Diagnose Cognitive Impairment Hindawi Publishing Corporation Behavioural Neurology Vol. 2015 1-6
- 中村延江 2015 主観的幸福感と脚本分析 総合的健康美学研究 第5号 68-72
- 中村延江 2016 自立高齢者の心理的側面の調査—自覚的自己評価と無意識の自己像について 総合的健康美学研究 第6号 62-68
- 中村延江 2017 所学者のためのバウムテスト 千葉テストセンター
- 無藤隆他 2004 質的心理学—創造的に「活用するコツ」 新曜社 東京-
- 森美保子 2008 自己対面法によるライフレビューが高齢者に与える影響 目白大学 心理学研究 第4号 85-99
- リディア・フェルナンデス、阿部恵一郎訳 2006 樹木がアテストの読み方—性格理解と解釈 金剛出版 東京
- 中川威 2018 高齢期における主観的幸福感安定性の変化 老年社会科学第40巻の第1号 22-31
- 西田裕紀子 2000 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究 48 433-443
- 前田大作 1989 高齢者の主観的幸福感構造と要因 社会老年学 No30 3-16
- 大野裕・吉村公雄 2001 WHO SUBI 手引き 金子書房
- Okun, M. A. & Stoc, W. A. 1987 Correlates and components of subjective ichiwell-being among the elderly Journal of Applied Gerontology 6 95-112
- P・バニスター他 五十嵐靖博他訳 2008 質的心理学研究法入門—リフレキシビティの視点 1-10, 207-220 新曜社 東京
- 坂口守男・朝井均他 2005 地域在住高齢者のバウムテスト 大阪教育大学紀要 第Ⅲ部門 自然科学・応用科学 第53巻 第2号 83-93
- 坂口守男・朝井均他 2006 地域在住高齢者のバウムテスト (Ⅳ) ::非認知症群における年齢間の比較 大阪教育大学紀要 第Ⅲ部門 自然科学・応用科学 第55巻 第1号 115-125
- Sell, H. & Napal, R. 1992 Assessment of subjective well-being inventory (SUBI). New Delhi. Regional Office for South-East Asia, World Health Organization
- 西條剛央 2008 ライブ講義 質的研究とは何か 新曜社 東京
- 佐藤秀紀他 1996 高齢者の主観的幸福感を規定する要因の検討 社会福祉学 37(2) 11 1-15
- Stewart, I. 1992 Eric Berne. London (日本交流分析学会誌) 2015 エリック・バーンの交流分析 実業之日本社 東京
- Steiner, C, M 1966 Script and counterscript TAB5(18) 133-135

- Steiner, C, M 1974 Script People Live ABantam Book Gropve Press, Inc
- 佐田彰見・芦原睦 1999 キャリアウーマンの脚本から脱し、不妊症も改善した身体表現性障害の1例 交流分析研究 24(1) 33-42
- 杉田峰康 1997 実践・交流分析(28) 脚本と決断 心身医療 第9巻 2号 71-76
- 柴田博 2017 介護予防は複合プログラムで 第30回 日本老年学会シンポジウム 抄録
- 島井哲志・大竹恵子他 2004 日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale:SHS) の信頼性と妥当性の検討 日本公衆衛生誌 第51巻 第10号 845
- 新里里春 1999 脚本分析の基礎理論 交流分析研究 第24巻 1号 5-17
- 新里里春 1996 実践・交流分析(23) インテーク面接で脚本指令を特定する方法—禁止令診断技法 心身医療第8巻 9号 69-72
- 高橋雅春・高橋依子 1986 樹木画テスト 株式会社文教書院
- 戸ヶ崎幸子・坂野雄二 1993 オプティミストは健康か? 健康心理学研究 6(2), 1-11
- 豊田加奈子・松本恒之 2004 大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究 東洋大学人間科学総合研究紀要創刊号 38-54
- 谷口幸一 1979 パーソナリティに関する一発達的研究—高齢者のバウムテストの分析及び知的・情緒的変数との関連について 老年社会学 第11巻, 32-48
- 山下真理子 1982 バウムテストの発達的研究—樹幹と幹の発達の傾向及び空間関係の描写について— 教育心理学研究 第30巻, 287-292
- 山下理恵子 2012 在宅高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼす要因について 日本健康医学会雑誌 第21巻第1号 144-145
- 山崎幸子 2005 高齢者の主観的幸福感に及ぼす社会関係の影響 人間科学研究 Vol. 18, Supplement 46
- やまだようこ編 2007 質的心理学の方法—語りをきく—2-14, 38-51, 100-113 新曜社 東京
- 山岡昌之 1999 再養育療法 (Reparenting Therapy) から見た脚本 交流分析研究 24(1) 65-69
- 山本裕子他 2011 社会階級による高齢者の主観的幸福感の相違について —人生歴を通して— 藍野学院紀要 第25巻 7-17
- 渡辺裕子 1984 老人の主観的幸福感尺度の方法論的検討 季刊・社会保障研究 第20巻 第1号 81-91